

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380865

研究課題名(和文) 自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル構築と統合的調整支援に関する研究

研究課題名(英文) A psychological research about the dual process model for autonomous motivation and encouraging integrated regulation.

研究代表者

伊田 勝憲 (IDA, KATSUNORI)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：20399033

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：学習者の生き方・アイデンティティに根ざして目の前の学習課題が意味づけられる「統合的調整」をはじめ、主体的な学習意欲としての「自律的動機づけ」を育む上で、楽しい・面白いという情動的側面と価値の内面化という認知的側面が同時並行的に機能していると考え、「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」を構築した。その中で、内容それ自体の楽しさではないが、教師をはじめとする指導者や学習者自身の工夫によってポジティブな感情を喚起する「擬似内発的動機づけ」が重要な役割を果たす可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)： This study constructs "the dual process model for autonomous motivation", including the integrated regulation based on learner's identity, that consists of two (cognitive and emotional) aspects fostering internalization of task-values. It is found that the quasi-intrinsic motivations, that is positive emotions driven by teacher and learner, may play the important role in the formation process of autonomous motivation.

研究分野：教育心理学

キーワード：自律的動機づけ 自己決定理論 統合的調整 課題価値 擬似内発的動機づけ

1. 研究開始当初の背景

(1) 1970年代以降、動機づけ研究で最も有力とされてきた自己決定理論(以下、SDT)では、非動機づけ(無調整)、外発的動機づけ(外的、取り入れ的、同一化的、統合的の各調整)そして内発的動機づけ(内発的調整)を内面化のプロセスとして連続的に捉えてきた。一方、1990年代後半から「内発=学習それ自体が目的(楽しさ、おもしろさ)、外発=学習が手段(報酬の獲得、罰の回避)」という形式的な概念区分と自己決定性(自律性)の高低がパラレルなものとして扱われていることへの疑問も提起された(速水、1995など)。その中で、他者が用意した表面的な楽しさによる「擬似内発的動機づけ」の概念が否定的に描かれているが、実証的研究は見られず、検討の余地が大きい。

(2) 上の2つの問題は、それぞれ動機づけの認知的側面と感情的側面に関わっており、両者の包括的検討が必要と考えられる。状況(感情)と個人(認知)から興味の発達を捉え、自己調整学習との関連づけを試みているHidiら(2008)の視点が参考になる。着想の経緯としては、課題価値の概念を用いて青年期の学習動機づけを捉えてきた伊田(2003)は、教員養成課程の学生を対象に、自我同一性や職業レディネス等を自律性の指標と見なし、課題価値との関連を検討した。その結果、学習活動の楽しさを重視する興味(内発的)価値ではなく、将来の職業実践に現在の学習内容を役立てたいという利用価値が自律的動機づけ像の中心であることが明らかになった。SDTに照らすならば「統合的調整」の優位性を示唆する結果と言える。

(3) 楽しさだけを強調しがちな内発的動機づけよりも、紆余曲折を経て「やりたいこと」と「やるべきこと」の折り合いをつけている統合的調整の方が自律性は高く、その折り合いをつける自己調整プロセスの中で、擬似内発的動機づけが促進的な役割を果たしているという可能性にも着目し、認知と感情を区分した上でSDTを発展させた「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」の着想に至った。

2. 研究の目的

(1) 自己決定理論(SDT)における外的・取り入れ的・同一化的・統合的調整の流れを価値(認知)の内面化プロセスとして位置づけると同時に、擬似内発的動機づけと内発的動機づけを状況的興味(感情)の発達プロセスとして位置づけ、両者が相互作用しながら自律的動機づけへと至るといったモデル(デュアルプロセスモデル)を想定し、質問紙調査

による概念間の距離等をもとにした実証的検討を行う。

(2) 擬似内発的動機づけ(擬似的な内発性)の表記が登場する速水(1998)と波多野・稲垣(1971)における記述を整理した上で、擬似と本物を区別する基準について可能な限り明確化する。そして、学習者にとって擬似内発的動機づけと考えられる経験をエピソードとして抽出し、他者(典型的には教師)によって興味が用意周到に引きだされるケースや、学習者自身が方略使用(ゲーム化など)により課題遂行に楽しさを自ら付加するようなケースなどの類型化を行う。

(3) マクロな視点として、従来の内発的動機づけ礼賛から脱却し、「やりたいこと」と「やるべきこと」の統合的調整を到達点と考え、これまで否定的に見られてきた擬似内発的動機づけについて自律性促進要因として肯定的に捉え直す。また、ミクロな理論的視点としては、価値の内容および内面化という認知的側面、そして楽しさという感情的側面を包括的に捉える枠組みを構築することができ、曖昧になりがちだった内発的動機づけおよび自律的動機づけの概念定義を精緻化(特に擬似内発的動機づけと区別)し、動機づけ発達とパーソナリティ発達の関連づけに貢献する。

3. 研究の方法

(1) 自己決定理論(SDT)の中で「統合的調整」がどのように描かれているか整理するとともに、統合的調整という用語を使わずに類似のプロセスを取り扱っている近年の自律的動機づけ研究を探索する。主に自己決定理論の中心である有機的統合理論(個々の課題や場面における動機づけ)と、近年新たに加わった目標内容理論(個々の課題や場面を超えた人生目標)の2つのミニ理論に焦点を当てる。加えて、少ないながらも統合的調整の測定を試みている研究(健康・運動領域の動機づけ、仕事への動機づけ)を精査し、学習場面で使用できる尺度開発のための項目化作業を行う。

(2) 擬似内発的動機づけのエピソード、すなわち、学習場面での「楽しさ」にまつわるエピソード(他者による楽しさの創出および学習者自身の工夫による楽しさの創出についての事例)を収集するため、これまでの学習活動にある程度熟達していることが期待される大学生を対象に質問紙法(自由記述)による調査を実施する。回答の際に、エピソードの時期(特に学校段階・学年)や対象教科等を可能な限り明記するよう求める。

(3) 自己決定理論(SDT)に基づく既存の質

問紙尺度等を参考に、統合的調整を含む動機づけ尺度項目を作成し、アイデンティティ等のパーソナリティ発達および学習意欲の価値的側面を捉える課題価値等の変数との関連を調査する。変数間の相関関係をもとに、デュアルプロセスモデルの検証を行う。

4. 研究成果

(1) 擬似内発的動機づけの概念化を明確化する中で、教師をはじめとする指導者の働きかけによってポジティブな感情が喚起される場合を「他者喚起型擬似内発的動機づけ」、学習者自身が工夫してポジティブな感情を喚起する場合を「自己喚起型擬似内発的動機づけ」として区別した。いずれの場合も、ここでいうポジティブ感情とは、学習課題の内容理解と直接には関係しない刺激による、表層的あるいは付随的な楽しさや面白さのことを指す。例えば、教師が授業の導入にゲーム形式の活動を取り入れて、そのお膳立てに乗って参加をするような場合は他者喚起型擬似内発的動機づけと言える。また、つまらない課題を何とかこなすために、カラフルな付箋紙を使ったり、問題集の解き方に自分なりのルールを設けてゲーム化したりするような場合は自己喚起型擬似内発的動機づけと言える。

(2) 上述の定義に沿って、大学生を対象に、擬似内発的動機づけと考えられる過去の経験をエピソードとして自由記述を求める質問紙調査を行った。時期が明確であった 89 エピソードのうち、小学校が 25 エピソード、中学校が 27 エピソード、高校が 37 エピソードであったが、他者喚起型と自己喚起型に分けると、その割合には有意な偏りが認められた。すなわち、小学校においては他者喚起型が 24 エピソードを占め、自己喚起型は 1 エピソードのみであった。中学校では他者喚起型が 22 エピソードに対して、自己喚起型が 5 エピソードであった。そして高校においては他者喚起型が 22 エピソードに対して自己喚起型が 15 エピソードとなった。他者喚起型のエピソードは小中高を通して一貫して見られるのに対して、自己喚起型は小中高と徐々に増加していたことから、他者喚起型擬似内発的動機づけを土台としながら、自己喚起型擬似内発的動機づけが形成されるというプロセスが示唆された。加えて、特に高校における擬似内発的動機づけでは、内発的動機づけとの区別が難しいか、あるいは内発的動機づけへの移行が期待される事例も多く見られた。

他者喚起型擬似内発的動機づけのエピソードの内容に着目すると、小学校ではシールやポイント制などゲーム性の強い事例が多く、また同時に、日記・連絡帳における教師のフィードバックなど、関係性を土台としている事例も見られた。中学校になると、ゲーム性は限定的になり、教師の留学体験談など、

同一化的調整に関わる事例が特徴的に見られ、雑談内容や話術・人柄といった要素が魅力として機能している。そして高校では、学習内容とのつながりが想定されるマンガや黒板アートなど、教師が工夫した教材を用意したことがエピソードとして多く挙げられ、アクティブ・ラーニングとしての魅力に関わる事例も見られた。

自己喚起型擬似内発的動機づけのエピソードとしては、中学校では、自分で自分に報酬を用意する自己強化、ノート整理や語呂合わせなどが事例として挙げられ、感情調整による苦手克服といった視点が特徴であった。高校では、視覚化・イメージ化による深い処理、精緻化された自己強化のルール、そして価値の内面化が土台となっているような、例えば、受験を前提とした取り組みが特徴として見られた。

(3) 有機的統合理論に基づく尺度項目を作成し、質問紙調査を行った。当初は、外的調整、取り入れ的調整、同一化的調整、統合的調整、内発的調整の各下位尺度を想定していたが、総合的調整と内発的調整の相関が高く、一方で、同一化的調整は自分自身の成長を目指す向上志向と、定めた進路目標等の実現に向かって達成を目指す目標志向とを分けて捉えられる可能性も検討された。多次元アイデンティティ発達尺度を用いた検討では、アイデンティティ発達の諸側面によって関連する学習動機づけの質が異なる傾向が描き出された。コミットメントとの同一化が私的獲得価値と制度的利用価値という個人と社会の価値をつないで同一化的調整と内発・統合的調整を機能させ、深い探求に至る中で内発・統合的調整がさらに進む等の可能性が考えられる。

(4) 有機的統合理論の枠組みに基づいて、内発的調整と統合的調整分けて分析を試みたところ、統合的調整と他の調整において、意欲を価値的側面から捉えた課題価値との相関に違いが見られるかという視点から分析を行い、統合的調整が 5 つすべての課題価値と有意に正相関している結果が得られた。統合的調整の名の通り、学習者が複数の価値を矛盾なく内面化・統合し、それらを同時に追求できていることが示唆された。すなわち、統合的調整をしている学習者は、1 つの課題に対して、その楽しさや自己成長への寄与のみならず、将来の職業実践への有用性や就職試験での有用性、そして他者からの評価を同時に得られることを期待し、外部からの期待と内面からの欲求との折り合いがつけられている状態にあると考えられる。一方、内発的調整や同一化的調整では有意な相関が認められない価値があるなど、統合の程度は限定的であり、統合的調整段階が最も自律性の高い状態であるという「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」が描く仮説を支

持する結果であった。

<引用文献>

- 波多野誼余夫・稲垣佳世子 (1971). 発達と教育における内発的動機づけ 明治図書
- 速水敏彦 (1995). 外発と内発の間に位置する達成動機づけ 心理学評論, 38, 171-193.
- 速水敏彦 (1998). 自己形成の心理 自律的動機づけ 金子書房
- Hidi, S., & Ainley, M. (2008). Interest and self-regulation: Relationships between two variables that influence learning. In D. H. Schunk, & B. J. Zimmerman (Eds.) *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications*. (pp. 77-109). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- 伊田勝憲 (2003). 教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像 自我同一性, 達成動機, 職業レディネスと課題価値評定との関連から 教育心理学研究, 51, 367-377.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

- 伊田勝憲 (2016). 学習動機づけにおける実践的利用価値の受動性と能動性: 知識「が」役立つのか, 知識「を」役立ててるのか 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇), 66, 135-146. (査読無)
- 伊田勝憲 (2015). 「擬似内発的動機づけ」の概念化可能性を探る: 自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル構築 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇), 65, 139-150. (査読無)
<http://hdl.handle.net/10297/9200>
- 伊田勝憲・原田唯司 (2015). 学校段階別に見る「擬似内発的動機づけ」のエピソード: 他者喚起と自己喚起の視点から学習相談を考える 静岡大学教育実践総合センター紀要, 23, 141-150. (査読有)
<http://doi.org/10.14945/00008896>
- 伊田勝憲 (2014). 教員養成課程学生の動機づけに見る有機的統合理論と課題価値の関係: 「統合的調整」は何を統合しているのか 自己心理学, 6, 9-19. (査読有)

[学会発表](計7件)

- 伊田勝憲 (2016). 多次元アイデンティティ発達尺度と教職科目への学習動機づけ 日本発達心理学会第27回

大会発表論文集, 509.

- 伊田勝憲 (2015). 回顧法による「擬似内発的動機づけ」のエピソード: 興味の他者喚起と自己喚起という視点から発達の変容を探る 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 250.
- 伊田勝憲 (2015). 興味と価値の二側面で捉える自律的動機づけ形成 伊田勝憲・鹿毛雅治(企画)自主企画シンポジウム「学習動機づけの発達を問う: 何がどう発達するのか」話題提供 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 88-89.
- 伊田勝憲 (2015). 学習への自律的動機づけ形成とパーソナリティ発達: 有機的統合理論における各調整と自我同一性の感覚との関連から 日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 122.
- 伊田勝憲 (2014). 教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の再検討: 課題価値と自己決定理論(有機的統合理論)の関係から 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 492.
- 伊田勝憲 (2014). 教員養成課程学生における仮想的有能感と学習への動機づけ 課題価値および自己決定理論の視点から 日本パーソナリティ心理学会第23回大会発表論文集, 104.
- 伊田勝憲 (2014). 大学生における課題価値と統合的調整の関係 日本発達心理学会第25回大会発表論文集, 627.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊田 勝憲 (IDA, Katsunori)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号: 20399033

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし